

で正中神経の枝が第Ⅱ－Ⅴ指の各筋束に分布する。前二者は筋内で交通する。3)の枝は筋に入る前に二分しそれぞれⅡ－DとⅢ・Ⅳ・Ⅴに至る。ITを越えた神経の交通は認められない。1)の枝は肘窩以遠で正中神経の尺側分束から分岐し本幹から分岐する3)の枝とは異質である。考察：FDSは筋線維束・神経支配ともに異質の2筋束がITで癒合したものである。支配神経1)と3)はそれぞれヒトのⅡ－P枝(RS)と、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ枝(RM)＋Ⅱ－D枝(RI)にはほぼ相同と考えられる。前述の仮説は原猿には適用できるといえよう。

課題 10

数種霊長目の三叉神経節への血管分布について

太田義邦・時岡孝夫・奥田仁志・竹村明道・岡田成賛(大阪歯大)

三叉神経節の位置と動脈分布は動物種によって異なる。また系統発生や個体の脈管の発生においても、この部分が重要な要となる所である。

今回我々が観察に用いた材料は食虫目コウベモグラ(*Mogera kobae*)と霊長目の中から原猿類ツパイ科コモンツパイ(*Tupaia glis*)、ロリス科ショウギャラゴ(*Galago senegalensis*)、真猿類オマキザル科コモンリスザル(*Saimiri sciurea*)、オナガザル科カニクイザル(*Macaca fascicularis*)である。

モグラでは神経節は側頭骨でなく蝶形骨大翼基部に存在し、動脈は外頸動脈の顎動脈と浅側頭動脈はなく、アブミ骨動脈の上・下枝が存在し、神経節へはこの下枝が分布する。コモンツパイではモグラ同様に蝶形骨大翼基部に位置するが、神経根は三叉神経孔を通して側頭骨錐体尖を貫いている。動脈はアブミ骨動脈下枝が消失し、神経節へは顎動脈の副硬膜枝が卵円孔を通して分布する。ショウギャラゴでは、神経根はツパイ同様三叉神経孔を通して錐体尖を貫くが、神経節の位置は前二者と異なり錐体前面に接して存在する。動脈はアブミ骨動脈上枝が末梢を残して消失し、顎動脈は確立されているが神経節への枝は派出されず、内頸動脈の頭蓋腔内からの枝が分布する。リスザ

ルでは、神経根は錐体尖を貫くことなく神経節は錐体前面に存在し、動脈はアブミ骨動脈が硬膜に分布する小枝となり、顎動脈は完全に確立され、内頸動脈からはイスにみられる吻合動脈が存在する。神経節へは顎動脈からの副硬膜枝と吻合動脈からの節枝が分布する。カニクイザルでは側頭骨錐体前面の三叉神経節圧痕に神経節が存在し、神経節への動脈は顎動脈からの副硬膜枝、内頸動脈からの節枝、さらに脳底動脈の橋枝からの節枝が分布する。

以上のように食虫目から一部霊長目への系統的比較観察を行なうと、三叉神経節の位置は蝶形骨大翼から側頭骨錐体前面へと中枢側へ移動し、また動脈においてアブミ骨動脈の消失にともなう顎動脈の確立および内頸動脈と外頸動脈の完全分離により三叉神経節への動脈分布が内頸動脈主体へと移動するものと考察する。

霊長類動脈系の系統発生学的研究

池田 章・吉井 致・三宅信一郎・井上 普文・田中 均(川崎医大)

霊長類の動脈系の研究は、ヒトの動脈系を知る上に重要で、ヒトの破格が霊長類で保存されていることが報告されている。我々は霊長類の動脈系の解析をおこなっているが、今年度は原猿類の動脈系の造影写真を立体的に観察し、系統発生学的に解析するとともにヒト胎児動脈系と比較検討し下記の結果を得た。

顎動脈：頭部動脈系を理解するうえで、顎動脈は発生過程において、アブミ骨動脈の消失にともない外頸動脈へ供給が変更される重要な部位である。観察した原猿類の顎動脈は基本的にヒトと同様の分枝を示した。

ヒト胎児動脈系と、ツパイ科、キツネザル科におけるアブミ骨動脈はヒト胎児第5期、40日の動脈系に類似し、ロリス科のアブミ骨動脈が中断された点で第6期、44日の動脈系と類似点が認められる。更にマーモセット科では中硬膜動脈が顎動脈より分枝している点が第7期、52日に類似しており、個体発生と系統発生の間に密接な関係が認められた。

上肢の動脈系：ロリス科にみられる動脈管束は